

武蔵野日曜集会

現真の霊

――ヨハネ伝第16章1～16節――

1985年1月20日（武蔵野）

小池辰雄

この世は憎しみの世界 時いたれば 自ら十字架にかかる 十字架を通つて助け主が来る 信
入行現 信即義 現真の霊 無然靈然 終末的現在を生きる 真を実現する世界

【ヨハネ16・1～16】

1 我これらの事を語りたるは、汝らの躓かざらん為なり。2 人なんじらを除名すべし、然のみならず、汝らを殺す者みな自ら神に事うと思ふとき来らん。3 これらの事をなすは、父と我とを知らぬ故なり。4 我これらの事を語りたるは、時いたりて我が斯く言いしことを汝らの思いいでん為なり。初より此等のことを言わざりしは、我なんじらと偕に在りし故なり。5 今われを遣し給いし者にゆく、然るに汝らの中、たれも我に「何処にゆく」と問う者なし。6 唯これらの事を語りしによりて、憂なんじらの心にみてり。7 されど、われ実を汝らに告ぐ、わが去るは汝らの益なり。我さらずば助主なんじらに来らじ、我ゆかば之を汝らに遣さん。8 かれ来らんとし世をして罪につき、義につき、審判につきて、過てるを認めしめん。9 罪に就きてとは、彼ら我を信ぜぬに因りてなり。10 義に就きてとは、われ父にゆき、汝ら今より我を見ぬに因りてなり。11 審判に就きてとは、此の世の君さばかるるに因りてなり。12 我なお汝らに告ぐべき事あまたあれど、今なんじら得耐えず。13 然れど彼すなわち真理の御霊きたらん時、なんじらを導きて真理をことごとく悟らしめん。かれ己より語るにあらず、凡そ聞くところの事を語り、かつ来らんとする事どもを汝らに示さん。14 彼はわが栄光を顕さん、それは我がものを受けて汝らに示すべければなり。15 すべて父の有ち給うものは我がものなり、此の故に我がものを受けて汝らに示さんと云えるなり。16 暫くせば汝ら我を見ず、また暫くして我を見るべし』

●この世は憎しみの世界

「我これらの事を語りたるは、汝らの躓かざらん為なり。」

「これらの事」というのは15章の内容です。



²人なんじらを除名すべし、然のみならず、汝らを殺す者みな自ら神に事うと
思うとき来らん。

大変なことです。殉教の――私は「殉道」と言うんですが、道に殉ずる――人が出てくる
ということを経キリストは予見しておられるわけです。それよりか真つ先にキリストは自分
が十字架ですけれども。「除名」というのは、要するにユダヤ教が旧約聖書の宗教を、預言
をそつちのけにして、律法に――「律法」と言う旧約聖書のことになるくらいですから
――それに反する者を除こうとする。キリストの世界は超律法の世界です。

「律法の一点一画もこれを全うする」

とキリストは言われるけれども、「一点一画」というのは決して文字通りにという意味では
ない。

「律法の根本精神を全うする」

ということ。けれども、律法の根本精神も、それ以上のものをキリストの山上の垂訓は、
大告白は語っているのです、モーセの十誡よりも山上の垂訓の方が内容的にはもちろん深い。
要するに、非常に極端な言葉でいうと、この超律法が、福音がユダヤ人にとっては反律法
なんだ。律法に反するという。だから、キリストの言うことはみんなけしからんというわ
けです。15章の後半に「憎む」という言葉がさんざん書いてあったでしょ。

「彼らはお前たちを憎む。その前に私を憎んでいる。そのことはまた神なる父を憎
んでいるんだ」

と。福音の世界は愛の世界だけれども、この世は憎しみの世界ということになってしまふ。
15章12節、17節に、

「¹²わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互に相愛せよ」(ヨハネ15・12)

「¹⁷これらの事を命ずるは、汝らの互に相愛せん為なり」(ヨハネ15・17)

とある。14節には、

「¹⁴汝等もし我が命ずる事をおこなわば、我が友なり」

とまで言っておられる。

とにかく表向き、律法に反するようなことをキリストは言っているものだから。本当は
内側からは律法を満たすけれども、それで彼らが躓いている。

「今言ったことは、しかし、君たちが躓かないためだ」

と。「憎まれる」と言うから、「どうしたらよいか」なんて思つて、ヘタすると躓く。

「殺すこともあるかもしれないが、彼らは自分たちが正統だと言つて自分たちが神
に仕えると思つている」

と。パウロがサウロ時代は正にそうだった。キリストを信ずる者を迫害することが神に仕
えるものだと、いきりたつていたんだ、サウロは。ところが、ダマスコ途上でやつつけら
れたでしょ。パウロを見ると、一番それがはつきりする。ユダヤ教と福音がいかに違



うかは、パウロ自身が身をもつて示した。あれくらい鮮やかなひっくり返りはない。それで、それくらい律法と福音が違ふということをパウロは書簡の中で口を極めて烈々と語っているわけですよ。

●時いたらば

³ これらの事をなすは、父と我とを知らぬ故なり。

全くわからない。神さまも私わからないから、そういうことになる。

⁴ 我これらの事を語りたるは、時いたりて我が斯く言いしことを汝らの思いいでん為なり。

「時がきたら」と。

「今はまだわからないよ。お前たちも、ある程度はわかったような顔しているけれども、実はわかってない」

と言うわけです。この「時いたらば」というのはなかなか意味深長な言葉です。

初より此等のことを言わざりしは、我なんじらと偕に在りし故なり。

「一緒にいたから余り言わなかったけれども、いよいよこれから別れるから、お前たちにはつきり言っておくが」

と、こういうわけです。

⁵ 今われを遣し給いし者にゆく、然るに汝らの中、たれも我に「何処にゆく」と問う者なし。

いつもキリストは、「遣し給いし者」ということを言う。神さまから遣わされた者、使者であると。アンゲロス。キリストは天の使いなんです。「遣し給いし者」に、即ち天に帰る。

「天からやって来たから天に帰る」

というわけです。「行く」と言ったって、本当はこれは「帰る」意味だ。けれども、「クオバデイス」「何処へゆくか」と聞く人がいないと。ギリシア語では、「プー・ヒュパゲイス」という。しかし、「何処へゆくか」という言葉は前にもちよつと出てはいるんです。13章36節に、

「³⁶ シモン・ペテロ言う『主よ、何処にゆき給うか』イエス答え給う『わが往く処に、なんじは今に従ふこと能わず。されど後に従わん』」

始めはペテロは躡く。けれども、聖霊を受けてからは、私のあとについて汝もまた十字架につけられると。

「なぜ、今は行けないんですか。生命を捨てますよ」

と。けれども、キリストは、

「わがために生命を捨てるか。けれども、汝みたび我を否むまでは鶏鳴かぎるべし」

と。こういうことをちゃんと見えて、あらかじめ言う方ですから、まあ驚くべき人です。



ちゃんと、捕らえられてからあと、ペテロがキリストを否むことまで見てしまっているんだから。

それから、トマスも言っているんだよ。14章5節、

「⁵トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、争でその道を知らんや』」

そうしたら、キリストが、

「⁶イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らば誰にても父の御許にいたる者なし。』」

と、全然別な答えをする。そして、問答の内容が変わってしまうんです。このトマスとの問答でキリストの言葉は非常に大事な言葉です。14章10節から14節まで。

けれども、今この場合において、今また新たに聞く者がいないという意味でしょうね。キリストは前に聞かれたことを忘れたわけではないでしょう。

●自ら十字架にかかる

⁶唯これらの事を語りしによりて、

自分はいなくなると言う、みんな心配して、

憂^{うれい}なんじらの心にみたり。

だいぶ、心配顔しているなと。

⁷されど、われ実^{まこと}を汝らに告ぐ、わが去るは汝らの益なり。我さらずば助主^{たすけぬし}

なんじらに来^{きた}らじ、我ゆかば之^{これ}を汝らに遣^{つか}さん。

はい、7節は大事な節です。

「自分がこの地上を去らなければ、この助け主は、聖霊は来ない。だから、私があるこのへんでサヨナラするのがお前たちには益である」

と。私の兄貴は27歳で仆^{たか}れました。それは私の家族にとっては非常なマイナスであった。けれども、それが私にとっては大変なプラスになってしまった。このマイナスは私の生涯を通して償いきれないかもしれないくらいマイナスです。けれども、一粒の麦が地に落ちて、私を通して多くの方々が福音の中に入ってこられたから、それはその意味においてはプラスだったんです。キリストは、

「お前たちと一緒にいたってダメなんだ。お前たちに聖霊が来ないうちはどうにもならない。聖霊を受けるためには、もうこのへんで自分はここを去らなければならない」

と。しかもその去り方はただ去るのではない。十字架を通して去る。だから、私は言っている。

「十字架を通らなければ聖霊は来ない」

ということとははつきりしている。聖霊はこの十字架を通らなければ来ない。そうすると今



度は、十字架もこの聖霊の中に入ってしまう。だから、十字架を通らない、十字架の土台のない、霊的な信仰というのは危ない。いわゆる神秘主義になる。御霊の世界はもちろん神秘です。

十字架というのは非常に躓きの言葉です。相対的には、パリサイ人、サドカイ人、祭司、教法師、ローマの官憲、民衆、みんながキリストを十字架にかけた。それは相対的な現実としてです。けれども、神の現実としては、キリストは、皆にかけられたからかかったのではない。それは自ら捨てたんです。人の罪を負うということ。これはイザヤ書53章です。旧約の預言を全うしたわけです。この預言をキリストはこの十字架で全うした。あそこに「砕け」という言葉があるから、私は「砕けの神学」なんていうことを言い出した。

「彼が砕かれたことによつて我々に安きを与える」

と。罪を贖ってしまった。相対的な事柄を絶対的な角度から受けとつていくんです、キリストは。意味が違ふんです。

我々の生活でもそうなんです。この世の相対的なことを通して、絶対的なものを証していくことが本当の証なんです。相対即絶対という構造になっている。この「即」の字はただ数学的な「イコール」ではない。

●十字架を通つて助け主が来る
だから、

「私が十字架を通つて天界に行かなければ、たすけぬし助主を与えるわけにはいかないんだ」

と。この構造をいい加減にしているから、いつまでたつても、ただ「十字架、十字架」と言つてみたり、ただ「聖霊、聖霊」と言つてみたり。どっちもダメ。我々はそこはしっかりと掴つかんでくださいよ。

十字架を通つて、助け主が来る。あなたがたを本当に助ける。これくらいはつきりした助け手はいないわけです。「パラクレートス」という字です。代弁者、弁護士、代わつて守つてくれる者です。もともとこの字は、言葉の意味からいえば、

「そのところへ呼び出された者、そのわきに立つてくれる者、その人のために呼び出されて弁護してくれる者」

という意味です。ヒルティは、

「何回生まれ変わつても弁護士になる」

と言つた。弱者のために、虐げられた人たちのために弁護してあげたいと。ヒルティみたいな正しい弁護士というのはめつたにいませんけれども。悪人のために弁護するやつもたくさんいるからね。

8 かれ来きたらるとき世をして罪につき、義につき、審判さはんにつきて、過あやまてるを認



めしめん。

「過てるを認めしめん」とは、過てることをちゃんと指摘して悟らせるという意味です。だけど、世の人は、いくらパラクレートスが来ても、それが分からない。一般の観念クリスチャンにも分からない。やはり、聖霊を受けるまでは実は、罪も義も審判もみんな本当の意味では分からない。まあ、キリストは一応こう言っておられるけれどもね。

9 罪に就きてとは、彼ら我を信ぜぬに因りてなり。

「かれ来るとき」の「かれ」というのは聖霊のこと、助け主です。パラクレートスが来ると、「罪について」とは、

「彼らが、世の人たちが我を信ぜぬ、私を受けとらない」
こと。「罪」とは不信なことだね。

「信ずるも信じないも自由だ」

と言う。憲法では、信仰の自由という。どういう宗教を信じようが自由だと。それはそれで結構です。ところが、自由は結構なんだけれども、

「信じないと、受けとらないと、これが罪だ」

という。「この悪い行為、この悪い言葉」ではない。キリストを受けとらないことが罪なんだ。「受けとらない」ということは、我を主張しているわけです。我があるんだ。汝（神・キリスト）に対して「然り」と言うときには、こつちの「我」はとれてしまう。汝に「然り」と言うときには、自分を「否」と言う。これが信仰の世界なんです。「はい」と言うときには自分を捨てている。自分を捨ててかからないと、本当の「はい」は言えない。これを「信ずる」という。

「どうもだいぶ分かつたから、まあ信じておこう」

なんて、そんなものはひとつも信仰ではない。

神さまは分からないね、これは。

「神さまがあるのに、なぜ戦争があるか。なぜ、こんな不公平なことがたくさんあるのか？」

なんて。大体、そういう疑問をみんな持つんだよな。だから、

「そんな神さまなんか信じられるか」

と思う。人間の理屈で解るところの神は実は神でない。神さまは解らない。藤井先生がいつか散歩しているときに、私たちにこんなことを言った。

「もう、私のはやけくそ信仰と言うんだ」

と。「やけくそ信仰」というのが本当の信仰なんです。まあ、言葉は非常に乱暴ですけども。

「もう、やけくそだ。解らない。とにかく、もう信ずるよりか道はない」と、こういうわけです。

天野先生は非常に道徳的な方だから、「道理の感覚」と言う。先生の主張はそうなんだ。



道理に合わないことに對しては戦った。それはいいですよ。けれども、神さまのなさり方には、人間の考える道理にあてはまらないことがいくらでもある。これは超道理の世界になる。

「我は道なり」

と言うけれども、

「わが道は汝らの道よりもはるかに高くて違うんだ」

と。「道、道」と言っているけれども道が違うと、イザヤ書に出ている。

「我は道なり、生命なり、真理なり」

と言うね。さつき出てきた。ここにも「真理」という言葉が出てくる。「アレテイヤ」という。こっちから眺めていたら解らないんです。この中に入ってみると、

「なるほどこれは真理だ、なるほどこれは生命だ、なるほどこれは道だ」

とわかる。絶対に傍觀を赦さないんです、神さまの道とか、生命とか、真理とかは。これは眺めて解る世界ではない。

●信入行現

考えたり、眺めたりして解るのは、神さまの世界ではない。だから、みんな躓く。そして、捨ててしまう。それを「罪」という。大変なもんです。だから、「信ずる」ためには、己を捨ててかからないと信じられない。神さまに「然り」と言わなければ。なんだか知らないけれども、「はい」と、返事をして実行する。そうするとわかってくるという、そういう世界です。「信ずる」というのは一番烈しい行為なんです。だから、信行、一如と言っている。これは素晴らしい言葉なんだ。信行君^{のぶゆき}という名前の方がいるけれども、これは素晴らしいことなんだ。信行一如ということ。

プロテスタントは、

「信仰によつて義とされる」

と言って、「信ずる」ということがみんな觀念にズレてしまった。

「それではダメだ、行為をちゃんとやらなければ」

というカトリックの言い分にも、ある真理性がある。ところが今度は、この「行為」は自分で一生懸命で行うのではない。信、即、行の世界です。「信ずる」とは根本的に自分を捨てかかることなんだから。自分に対して「否」と言つて、そして、汝に対して「はい」と言つて、

「汝の意志を成させたまえ」

と。キリストがそれで貫いたんだから。

「わが意志にあらず、汝の意志を。御意^{みこころ}をどうぞ私を通して成してください」

と。あの「成させたまえ」は絶対に傍觀ではない。

「私を通して成してください、自分は捨て身で行きます」

と。行の世界です。難行苦行の行ではないよ、この行は。それは現実にやってみたら、難



行苦行的なこともあるでしょう。けれども、いわゆる難行苦行で、こっちから何かやっているのではない。自分を投げ捨てるのが信入なんです。そうすると、行現してくる。行として現ずる。「信入行現」なんていう熟語はないですよ。今初めて言っただけでも、信入行現の世界です。

私は無教会で育ってきたからね、無教会は皆さん

「信仰によって義とされる」

と言って、それでいい気になっている。それでは本当はダメなんだ。西行^{さいぎやう}だとか芭蕉^{ばしやう}みたいに、日本中を歩いて伝道しなければ本当ではないんですよ、こんなところでお話しているのでは。けれども、私には私の使命があるから、こういうやり方ならざるを得ない。残念ながら。けれども、本当の伝道者はやはり歩いて語っていかなければダメ。日蓮でもみんな。だから、ああいう人たちに対して私はもちろん非常な尊敬をはらいます。行の世界なんだ。

この「信ずる」というのはそういうことなんだ。捨て身でかからなければ、「信仰」なんて言っただけでダメだ。仰いでいたってダメなんだ。仰の字は要らない。信だけでたくさんだ。「コウ」の字をつけるなら、「交」と付けたらいい。あるいは、「行」の字をつける。「信交」「信行」だ。もう、それくらい、表現の革命をしなければダメなんだ。私もし聖書を訳したら、「信仰」の「仰」の字は「行」の字を書いてやろうかな。まあ躓きになるだろうね、これがいつまでたっただけでわからないから。

それが「罪」なんだ。「信ぜぬによりてなり」というのはそれだけの内容を持っている。観念信仰もダメ、落第なんだ。

皆さん、もう大胆にやりなさいよ。そうすれば、本当のものは必ず訴えますから。響きますから。水を割ったらダメですよ。そして、そういう生き方をしていると、

「やっぱり、あれは違うな、本ものだな」

ということがわかってくるんです。

まあ、何でも、命懸けでやらなくてはいいかん。私は本当に遅まきながら、これから命懸けで詩を書きます。もうスタートは切ってますけれども。絶対に書きます。とにかく、何でも自分のすることに全身を投じてやること。人に何と言われたっていいですよ、それが生きがいのある生涯になるんです。

●信即義

10 義に就きてとは、われ父にゆき、汝ら今より我を見ぬに因りてなり。

妙なことが書いてあるね。これは何のことですか。註解書を見たって、よく解らない。キリストはただ一人の義人である。

「義人なし一人だになし。キリストだけが義人だ」



と、パウロがいました。これは神さまを100%に信じたこと。そして、信入したこと。すべて「はい」と言って進んで行ったこと。己を捨ててかかって行ったこと。これが「義」なんです。正義ではない。

「自分は地上をそのようにして歩いて、今や天界へ行く」

と。このキリストの実存が「義」なんです、

「今や父の許にゆく」

というのが。

「義に就きてとは、われ父にゆき」

そして、あなた方は私を見ないからだ。

「汝ら今より我を見ぬに因りてなり」

と。非常に謎みしたい言葉です。そういう在り方。父の許にゆく。しかも、ゆくのはただでゆくのではない。十字架を通ってゆく。十字架は義の焦点ですから。極点です、十字架は。

「こんなに義を貫いたのに、あなたに信を一貫したのに」

と。だから、この信と義とは一つ。信と行が一つ。信と義が一つ。

「信仰によって義とされる」

とパウロが言ったのは、

「本当に信ずるということが即ち義なんだ」

と言ったっていいんですよ、「義とされる」なんて言わなくてたつて。信、即、義と言ったらいい。

「によって義とされる」なんて言う必要はない。

「信ずることが義なんだよ」

とパウロは言ってくれば、簡単だったんだ。こんなことを普通は言わないでしょうね。私はどうでもいいですよ。神さまが、キリストが御霊をもつて言わせているんだから仕方がない。信即義、信即行ということ。

もう第一流のものを相手にしてます、私は正直。そういうどんなものを読んでも、御霊の光でパッパッと分かってくるから。御霊の光ですよ。真理は実に渾然としているからね。分割なんかできない。渾然としているから。みんな即でつなぐような世界です。

「父より出て父へ帰る」

という。その帰り方は十字架を通して。大変な帰り方です。

●現真の霊

「審判に就きてとは、此の世の君さばかるるに因りてなり。」

これはもうはつきりしているね。「この世の君」とはサタンのこと。サタンが審^{さば}かれる。これは大変なことだな。もうキリストはサタンに勝って、そして今にサタンが審^{さば}かれる。サタンに従っている者もみんな審^{さば}かれる。これはこないだ黙示録でやったとおりです。ヨ



ハネ黙示録は『エン・クリスト』誌19、20、21号に書きましたから。

私は非常に集約して書いてあるけれども、『エン・クリスト』は本当に大事な雑誌ですよ。皆さん、どんどん伝道に使ってください。生きるとは伝道することであります。もう少しそういうことに真剣になっていただきたいと思う。救いを求めている人に、また、救いを求めることも知らないでいる人に、

「まあ、読んでくらんなさい」

というわけで。

「来たりて見よ」

と言って、集会に連れてくればいい。連れてきて、そいつがまた出て行ってもいいよ。躓いても、一向差し支えない。とにかく、いつペン聞けば、何かがそこに響くわけです。私はそこらを歩き回ることができないから、集会はとにかく、私がぶつたおれるまでやりますからね。

¹² 我なお汝らに告ぐべき事あまたあれど、今なんじら得耐えず。

「私は今、言うべきことがたくさんあるけれども、話してもどうも無駄だ。本当は、聞き取れない。仕方がない。けれども、今に聖霊がきたら」

と、今度は、キリストが言おうとしているわけです。本当にその通りなんだよな、これだから、もういい加減でやめようという。

¹³ 然れど彼すなわち真理の御霊きたらん時、なんじらを導きて真理をことごとく

とく悟らしめん。かれ己より語るにあらず、凡そ聞くところの事を語り、かつ来らんとする事どもを汝らに示さん。

この13節は大事な節です。「真理の御霊」というと、「真理」という言葉がとかく観念的に響いて困る。言葉というのは妙なもので、その使っているときのその味というものはちがう。だから、あの時代にはどんな気持ちでこの言葉が使われているかということが、本当の言葉の研究には絶対に必要なんです。この神学者は、この哲学者は、どういう気持ちでこれを使っているのかということだね。同じ言葉でも、ニュアンスがいろいろ違うんだよ。

ギリシア語では、「アレテイヤ」というのが「真理」というんですが、これはもともと「アレテース」という形容詞的な言葉で、「ア」というのは否定の言葉です。もともと、「アレテイヤ」という字は「レートー」という「隠す」あるいは「隠れている」という動詞から来ている。「ア」というのは、「隠れているものでない」という、否定している。「隠れたものを顕す、隠さない」という意味になる。隠れたものを露あらわにあらわすこと。「アレテイヤ」というのは、「隠れたものが顕されているもの」ということ。

「現」なんです。隠れているまことのものが「真」、「真を現する」。だから、私は「現真」という新しい熟語を造った。「真理」というと、真の「ロゴス」でしょ。それでも悪くはないけれども。とかく「真理」というと、もう出来上がったひとつの観念的な概念になって



しまう。ところが、もつと動的な意味を持つている。隠れた真^{まこと}のものを――「隠れたもの」と言つたつて、これは真でなければダメです――それを「露^{あらわ}にする」という。隠されてないということ。

「アポカリプシス」(黙示録)もそうだね。顕現する。「黙示録」は、本当は顕^{あらわ}に示すという「顕示録」なんだ。現真なんだ。また、必ず、現れているというためには、そこに動的な内容があるわけです。実現する。だから、それはまた現実でもあるわけです。本当の現実。これも「アレテイヤ」です。言つたことは必ず成就できなければいかん。それが本当の誠^{まこと}なんです。言は成る。神さまやキリストの仰つたことは必ず成る。それだから、それを「真理」「アレテイヤ」と言う。

現真なんだ。必ず成る。現れている。現真の霊だから、この霊は必ず本当のことを現す。聖霊は成就するところの霊だという。その現し方は、目に見えるように示すことでもあるし、また行為によつて体験されることも、あるいは体現されることもある。非常にその内容はふくらみがあります。説明しきれませんが、それが現真の霊、現真の御霊です。

●無然靈然

そういう現真の霊、現真の御霊がある。真^{まこと}でいいです。真の御霊。真を実現するところの御霊。真を現するの霊。裏表のない霊です。よくあるよな、えらそうな顔をしてみたりね。もう私はああいう出来上がったようなのは大嫌いなんだ。あるがままで結構です。やつぱり、大愚だとか、大無だとか、そういう世界です。そこが本当の現真の場です。現真の姿なんです。私はこういう言葉がふと浮かんできた。「無然」。私は「無然靈然」と言う。この無然というのはいい言葉だな。何もポーズがない。八方破れです。

¹³然れど彼すなわち真理の御霊きたらん時、なんじらを導きて真理をことごとく悟らしめん。

その現真の霊がやつて来たならば、お前たちを導いて、本当のことを、本ものを、本当の世界をことごとく知らせると言う。

かれ

現真の霊は、

己より語るにあらず、凡そ聞くところの事を語り、
神さまから聞いたことを語っている。

かつ来らんとする事どもを汝らに示さん。

終末の世界のことです。「来らんとする事」とはもう、キリストは世の終りのことを言っている。

¹⁴彼は

現真の霊は、



わが栄光を顕さん、それは我がものを受けて汝らに示すべければなり。
本当にその通りですね。

¹⁵すべて父の有^もち給うものは我がものなり、

このような言葉の中にもう渾然として、父と子と聖霊が一つであることが、これでもわかる。キリストの中には生きた神学がちゃんと含まれている。それから、パウロがそれをもっと重厚にやった。「神学」という言葉もまた躓きになるけれども、いわゆる出来上がった神学ではない。哲学もそうです。カントが、

「哲学とはフィロゾフィーレン、哲学することのほか何ものでもない」

と言った。神学も、神学することなんだ。聖書を本当に読んで、そしてそれが生きたロゴスになったときに、一人びとりが神学を持っている。神学する、神学しつつあるんです。聖書の説明そのものが生きた神学そのものである。ただいわゆる学となると、論理的な表現の仕方をしないと学でないように一般の概念はなっているから仕方がないけれども。だから、私の「無の神学」なんていうものは躓きの神学です。

此の故に我がものを受けて汝らに示さんと云えるなり。

「みんな聖霊が私の代わりに――代弁どころではない――私の代わりにお前たちにいろいろ示す」

と。本当にそうだものね。御霊が来たら、聖書が楽になっちゃったから。ことごとくだ。何でも教えてやるよと。だから、御霊を受けているあなた方は、御霊を受けて語っている私と一緒に、

「ああ、そうだ、そうだ」

とうなずいているのがこの集会というものです。そして、お互いにいいよその世界を進んで行きましょうという。いわゆる学校ではない。

だから、御霊を受けなかったら、本当は聖書を解説してはいけません。また、本当はできない。ところが、私は無教会から独立して、1940年から始めたけれども、1950年まではまだ観念信仰の中に半分入っていて、何かまだくすぶっていた。そのくすぶりが1950年でとれた。阿蘇の滝見荘でもって取れた。それまでは、お話するとかたびれていた。ここからくたびれなくなっちゃった。

●終末的現在を生きる

¹⁶暫くせば汝ら我を見ず、また暫くして我を見るべし¹⁷

それは聖霊でやって来るから。御霊としてやって来る。また、再臨するからと言う。どっちの気持ちも入っているでしょうね。キリストはそれくらい世の終りを非常に迫ったものとして見ておられたから。神さまのところへ行つて、また戻ってくる。十字架を通ったら、もつと凄い霊体になっている。大体、こここのところで、復活してから四十日もみんなに現れた。



このこともその中に入っているかもしれない。みんなは、十字架にかかって死んでしまったかと思つたが、どっこい現れて来る。しばらくすれば、現れる。また五十日目には本当に聖霊としてやって来る。それから今度は、再臨でやって来る。

まあ、ヨハネはエライ靈幻を、靈的な幻をパトモスで見せられたものだね。私は黙示録を書いていて本当にそう思つた。

「また別の使いが…、また別の使いが…」

と言つて、使いがしょっちゅう現れていろいろなことを示す。旧約のイザヤ書が一番黙示録に応えている。相照応しているところが多い。あれは、しかし、もう絶対空間です。この相対的な地上においてその絶対空間的なところを生きているようなことにならないと、黙示録が本当に身につかない。ただ希望の世界ではない。望みもまた現じていなくては。「現望」なんていう言葉はないけれども、希望もまた現在において現ずる。これを「終末的現在」という。終末的現在を生きていければ、

「天国は汝らのうちにあり」

ということとは、終末的現在を生きることです。だから、世の中がどんなに不合理であろうと、苦しかろうと、不如意であろうと、そこに天界を現しながら歩いている。

この頃、私はグリムのお伽話を読んでいたけれども、魔法使いが随分出てくるね、グリムには。けれども、グリムの中にはなかなか福音的なものがパツパツとある。私は「グリム童話とキリスト教」という題で文章を書いてくれと言われているものだから、面白いのが書けそうだ。今度、北欧へ行くと、アンデルセン、キルケゴール、イブセン、いろいろいるよな。魔法でなくて、御霊の靈法の世界で現実を変えていく。周りに天国を現じていく。そうだな、私は余裕があれば、お伽話を書きたいと思うけれども。そんな余裕がないから、私の詩の中に出てくるよ。そこがありがたいです、詩の世界は非常に自由だから。

●真を実現する世界

それで、ヨハネ伝15章26節を見ると、

「²⁶父の許より我が遣さんとする助主、^{たすけぬし}

聖霊、現真の霊、

即ち父より出づる真理の御霊

ここに出てくるね、現真の霊、

のきたらんと、我につきて証せん。」

「つきて」と言つたつて、むしろ「我を証せん」と言つた方がいい。我を証する。「関して」と言うと、何かちよつとズレる。ルターもよく「関して」と言っている。「クリスチャンの自由について」の「ついて」はいらない。「クリスチャンの自由」でたくさんだ。

塚本先生が「何とかに信ずる」と言つた。ギリシア語の形からいうと、三格みたいな「何々に」



なんだ。「を信ずる」でなくて、「に信ずる」というようなことを言うものだから、それからあと随分大勢の無教会の人が、「を信ずる」でなくて、「に信ずる」というようなことを言っている。私はつむじ曲がりだから、相変わらず「を信ずる」でいい。なぜかというところ、「に信ずる」とは「に信頼する」という意味なんです。「を信ずる」という、ものを対象的に「を信ずる」ではなくて、「に信頼する」方がもつと人格的だという意味で、それで、「に信ずる」と塚本先生は言い出したけれども。私は、「を信ずる」なんだ。これは対象ではないんです、私にとって「を」は。その「を信ずる」は、それを信受する、体受するという意味で、「を信ずる」と私は言いたい。キリストを受けとるんです。「に信頼する」よりか、「を受けとる」方がもつと内容的に強いんです。「に信頼する」というのはひとつの距離がある。

藤井先生も

「信頼、信頼」

と言っていた。藤井先生はもうとにかく——先生をとおして「信頼」ということを教わったと言つてもいいくらいに——「信頼、信頼」でした。先生は本当に信頼して生きておられたからね。それはそれでいいんです、立派なもんなんです、先生は。けれども、「に信頼」よりも、「を信ずる」「を体受する」と、もの凄い聖霊の世界に入る。その点で、

「内村鑑三、藤井武といえどもパウロの次元からはズレている」

ということを私が言っているのは、そういうことなんです。

「小池の野郎は生意気だ」

なんて言われても、仕方がない。生なまで生きているから(笑)。もうしようがないよ、私は。誰に認められなくてもいいよ。けれども、あなた方は本当に受けとってくださいよ。

「を信受する」ということ。信受とか、信入とか。私はこういう漢字の熟語が大好きなんです。それでなければ言えないから。「信じ入る」だっていいけれども。信入している。

まだ10年や20年は戦わなければしょうがないよな。ただ、イザヤは本当に小さき群に語っていた。そのように私もあなた方小さき群に語っていきます。録音もしてあるからね。録音というのはとにかく響を持っているから大事なんです。みんな録音されてたくさんあるけれども、これはどこに持つていくのか知らないが、いい加減なところに持つていつてはダメだぞ。

「²⁷汝等もまた初はじめより我とともに在りたれば証あかしするなり。」

と仰ったってダメなんです、この現実の「汝ら」は。みんなキリストは、聖霊を受けた先の汝らを思つて、言つてらっしゃるんですけれども。それくらいはつきりしているんです、御霊の世界は。

だから、キリスト教の歴史は聖霊降臨から始まつて、そしてそれで続いていくわけなんです。ところが、聖霊が非常に希薄な場合が多いわけだ。それで時々爆発するわけだ、火山の爆発みたいに。休火山から死火山になったって、それから爆発すると、これは聖霊の噴出だ。



火山が爆発したら、

「これは聖霊の噴出を示しているんだ」

くらいに思ってください。

私たちは、キリストは

「汝らはもう僕ではない、これからは友だ」

なんて仰ったって、僕でもあり友でもあるんですよ。そういうことに、聖書の言葉にこだわったらダメなんだ。

そういうことで、私たちは、この現真の霊、現真の御霊で、それが言葉として現れたり、行為として現れたり、とにかく、空手形ではない。だから、観念ではない。非観念の霊。これはキリストの中に祈り入ることによって受けとれる。要するに、十字架を通ってキリストの中に祈り入ること。そうすると、聖霊が働いて来る。一瞬にして働いてくる。そして、こっちはもう空っぽになる。自分なんてものはすっ飛んでいる。もの凄い烈々たることになる。その「烈々」という言葉が何か非常に烈しいようだけれども、静かな烈々もあれば、炎のように燃えるような烈々もある。

なにしろ、そういう光でもあり、生命でもあり、真を実現する世界でもある。「真理」という言葉がもう観念からすっかり抜けた言葉になってくれないと困るよ。だから、「現真」なんていう言葉を私は今日使いだした。そして、十字架をキリストが通れば、それがやってくる。

「十字架の贖罪を完全にやってしまうから、聖霊はお前たちには文句なしに入ってくる」

と。だから、先に突入してきたよ、パウロの場合は。それから今度は、十字架が見えてきた。どっちでもいいよ。とにかく、この十字架と聖霊は、はつきりとその構造が不可分の関係になっていなければダメということです。そうすると、

「いっしょにいっしょに」

という。聖書は、本当の意味でことごとく分かってくるという。聖書に限らない。何を読んでも、何を見ても、真理を捕まえだす。

この聖霊の助主、現真の御霊、真を現ずるところの御霊は、それでまた真を本当に知らしめる。御霊がくると、もちろん言葉の一番深い意味において真理も知らせます。聖霊の光で見るくらいいいことは、ありがたいことはない。

